

情報技術の

PROFESSIONAL

第61回

ストレージ・アーキテクトの匠^{たくみ}

匠

風を待つのも、幸せな時間

通勤は3線を乗り換えて片道100分。時間だけ見れば、いわゆる「痛勤」だ。しかし、松本にとって、この100分は無駄な時間ではない。むしろ自分が選んだ幸せな時間。

100分の間は、技術文献を読んだり、スマートフォンで情報を取り入れたりする大切なインプットの時間。それだけではない。自宅から好きな海までは歩いて5分。松本の趣味はサーフィン。海にいる時間、海のそばにいる時間は、何にも代えがたい、自分に帰る時間。

「サーフィンを始めたのは、横浜に住んでいた大学時代です。大学では船舶海洋工学を専攻しましたしともと海が好きだったんです。また、研究室の先輩や同級生にサーファーがいた影響もあって海に通うようになりました」

本格的に楽しむようになったのは、社会人になってから。湘南に移り住み、休日は1日中、波に乗ることもある。

「波が大きい時はしんどいし、危ない場面もあります。普段は基本的に安全志向なのですが（笑）、そのスリルが楽しさの1つなのかもしれません」

自然を相手にする。同じ波はひとつもない。最高の波を待つ、風がやむのを待つ。そんな海を見つめる時間も自分の時間。そして沖に出れば、海からしか見えない景色を楽しむ。湘南では江の島に富士山、烏帽子岩と沈む夕陽…。季節や時間ごとに変化する美しい風景がいつでも心を解き放ってくれる。バリ島では、インド洋の、時にどう猛に牙をむく波が割れる瞬間、そして陸からは見ることでできない、断崖絶壁を見上げる。一瞬のスリルと忘れられない情景。

のめり込んだ理由は、サーフィン自体の面白さもあったが、同時に「コミュニティ」の魅力もあった。

「仕事でも、お客様、先輩、上司、同期、後輩から、いろいろな刺激をもらっているという実感がありますし、サーフィンも人とのつながりが楽しい。仕事や年齢に関係ないコミュニティは心地いいですね」

感性はそれぞれ違うが、サーフィン好きという共通の思いがあるから、話が弾む。サーフィンについての情報交換はもちろん、話題はさまざま。その中で、ふとした何げない会話が、仕事のヒントや刺激につながることもあるという。

「『刺身の鮮度とワインの熟成。どちらもそれぞれの価値がある』



松本 耕介（まつもと こうすけ）

日本アイ・ビー・エム株式会社
グローバル・テクノロジー・サービス事業
ミッドレンジ・サーバー・マネジメント
アソシエイト・アーキテクト

【プロフィール】

2001年、日本IBM入社。製造分野でのアプリケーション開発、IBM社内システムにおけるサーバーやストレージの設計・構築・運用、大規模ファイル・サーバー統合プロジェクトなどを経験。2007年より金融のお客様のSOプロジェクトにて大規模ストレージ統合およびバックアップ統合を担当。2011年よりSMS*のリード・アーキテクトとしてストレージ・サービスの設計・開発を指揮している。

* SMS…IBM SmarterCloud ストレージ・マネジメント・サービス:日本IBM提供の従量課金型のストレージ・クラウド・サービス(<http://www.ibm.com/services/jp/ja/it-services/sbcsms.html>)

そんな話が仕事の刺激になったこと
もありました」

松本の仕事であるビッグデータを扱うストレージの世界。そこでは「データの鮮度」という表現で、その取り扱いについての議論がなされている。

「ストレージの階層化という考え方があります。鮮度の高いデータはアクセス頻度が高いため、処理速度の速いディスクに置いて、長期保管用のデータは、大容量でコストの低いディスクや磁気テープに置く。全体として効率のよい投資をしましょう、ということなのですが…」

ストレージの世界では以前から知られている考え方だが、ここで松本が悩んでいたのは、お客様にとって価値のあるデータというのは、必ずしも高価な処理速度の速いディスクにある鮮度の高いデータとは限らないのではないかということだった。

「鮮度が高いデータが高価なディスクに置かれるのはスピードが求められるからですが、データの価値そのものが高い、というのとは違うんじゃないかとも思うんです。古いけれど価値のあるデータというものがあるのではないかと。蓄積があるからこそ生まれる価値があるんじゃないか。ビッグデータやアナリティクスの潮流は、データの価値を決めることをさらに困難にしていると思います。例えば、古いデータでも分析をしようとするストレージにスピードが求められるケースもあるわけです。データの配置だけではなく使用方法に応じて自由に移動できるモビリティも重要な要素になってきている。すべてはビット情報。し

かし、使う人によって、使う目的によって価値やシステムへの要求が変わっていく。この点をもう少しうまく利用できるような、新しい実践的なフレームワークがあると面白いと考えているんです」

刺身は鮮度に価値がある。しかし、ワインには熟成という価値がある。仲間たちのおいしいものを飲み、食べながらのリラックスした時間だからこそ、腹に落ちること、気が付くことがある。解決法はITの範囲の中にだけあるわけではない。

「例えばトランクルームもディスクも同じストレージだけあってアーキテクチャーの考え方は共通点が多い。可用性、キャパシティー、将来予測、スケーラビリティ、そして値付け。トランクルームの区画もディスクの区画も、入れたい物が増えたからといってすぐに増やすわけにはいきません。ITの世界も、物理世界の事象に置き換えて考えると理解しやすいことも多いですよ」

テーマを一度抽象化して、再構成し、それを具体化する。異業種の仲間との会話の中に、本質が見えたりもする。ストレージのエバンジェリストが中心となって活動している社内コミュニティーでは、『データ爆発』というテーマで議論したことがあった。

「データが爆発的に増えるといわれていますが、データ爆発ってそもそも何だろう? というところから議論がスタートし、ある時間の中で何か非常に大量に増えるということを爆発と呼ぶと定義したのですが、ある時間ってというのが人によってまったく感覚が違うんですね。数

秒だと言う人もいれば、わたしのよ
うな長期間の運用担当者は年単
位のスパンでとらえたりする」

技術論だけではなく、文化的な側面や他業種・業界の現在をからめながら、抽象化し再構築していくことで、お客様が欲している真の目的を探していく。

「お客様が求めている要件をITの要件に翻訳し実現可能なアーキテクチャーを作成するのがアーキテクトとしての役割。世の中のことを知っている、興味を持つ。それが、お客様が発する言葉の裏側や行間を読み取る力になると思います」



松本が座右の銘にしている言葉がある。「人生は無駄はない」。大学時代の恩師が掛けてくれた言葉だ。

「サーフィンにはコンディションが良くなるのを待っている時間の方が長い。その間に、『いざ、いい波が来たら、さあ、行こう!』となれる準備をしておかなければいけません。仕事も同じ。自分が頑張るタイミングでしっかり頑張れることが大切。そしてそこに至るまでの待っている時間の過ごし方も大切なんですよ」

通勤100分、海まで5分のITアーキテクト。人生には無駄はない。吸収すべきことはいくらかもある。仕事でも遊びでも、インプットもアウトプットも。風の時間と、スリリングな時間も。思い通りになることと思いついてはならないことだって、サーフィンをしていけば分かる。それも、幸せな時間だということが。